世界遺産情報誌 No.4

紀伊山地の霊場と参詣道

三重県　奈良県　和歌山県

Sacred Sites and Pilgrimage Routes in the Kii Mountain Range

神秘の霊場誕生!!

昔むかし、飛鳥や奈良、京の都に住む人々は、いのちの源(みなもと)である太陽の光がさしてくる南の方角を「聖なる方角」と考えていました。

その方角にあって、太平洋に突きだした紀伊半島は、人間以上の存在が支配する未知の世界に最も近く、しかも人間が立ち入ることもまれな険しい山岳地帯であったため、すでに神話の時代には「神々が鎮(しず)まる特別な場所」と考えられるようになりました。

中でも、人々に神の存在を強く感じさせるような岩や山、滝や大木などがある所では、神々をおそれ敬(うやま)い、その意向をうかがうとともに、願い事を聞いてもらう「祈り」がくり返されるようになり、神社の原形ができました。こうした神々に対する日本古来の信仰を「神道(しんとう)」といいますが、世界遺産を構成する三つの霊場「吉野(よしの)・大峯(おおみね)」、「熊野(くま)三山(さんざん)」、「高野山(こうやさん)」でも、まず最初にその場所特有の神々への祈りがあったのです。

それから後、飛鳥時代に朝鮮半島の百済(くだら)から伝えられ、律令国家(りつりょうこっか)をまもる教えとして積極的に採り入れられるようになった「仏教」では、人々を悟りに導き救う「仏(ほとけ)」や「観音菩薩(かんのんぼさつ)」が「浄土(じょうど)」とよばれる山上に住むと説かれたため、昔から聖地として知られた紀伊山地に修行のために分け入る僧侶があらわれ、次の奈良時代にその足跡は紀伊半島の南端にまで達しています。

さらに、飛鳥時代から奈良時代のはじめに宗教的な能力で活躍した「役行者(えんのぎょうじゃ)」という人は、神々への祈りに中国の仙人思想や仏教などを合わせ、山の中で超自然的な能力を身につける「修験道(しゅげんどう)」という信仰を始め、吉野から熊野にいたる山々を、修行場として開いたと伝えられています。

また、それからおよそ百年後、平安時代のはじめの頃に、新しい仏教として中国からもたらされた「密教(みっきょう)」も、宇宙の万物を支配する「大日如来(だいにちにょらい)」の力を人間の内に呼び覚ます修行の場として、紀伊山地の一角、「高野山」を選びました。

このようにして、紀伊山地には、まず「吉野」、「熊野」、「高野」という三つの「聖地」が誕生しますが、それが「霊場(れいじょう)」となるには、大きな二つの要素がはたらいています。

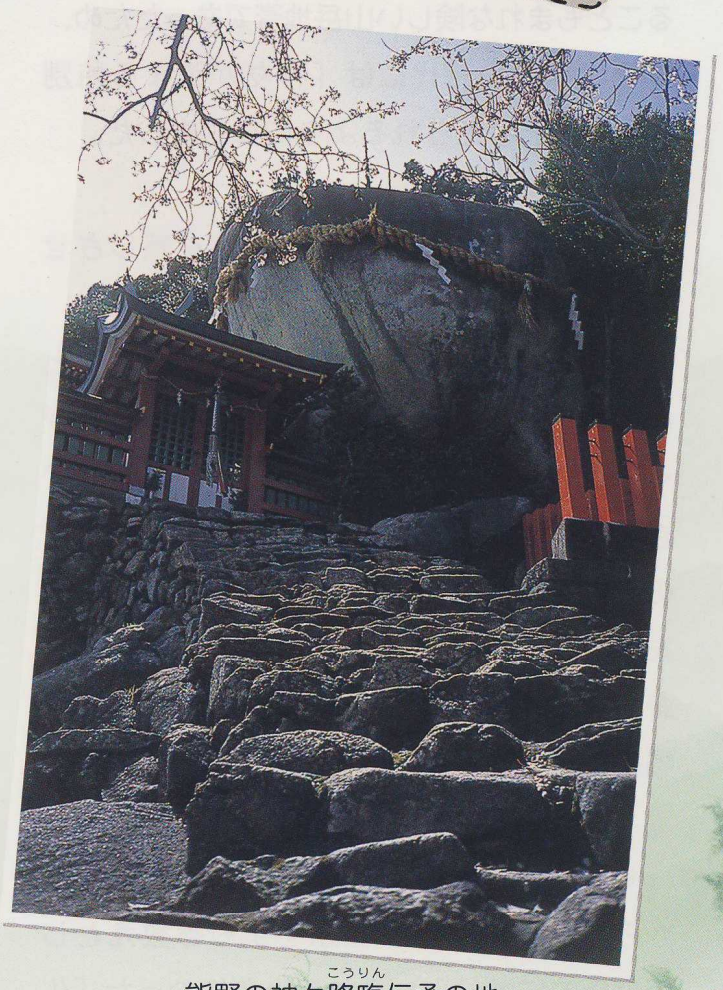
その第一が、「本地垂迹」という考え方の流行です。これは、そもそも日本の数多くの神々は仏教の仏や観音（これを本地といいます）が人々を救うために貴い人のすがたを「権りて現れた」（迹を垂れた）とするもので、そこから神々を「権現」と呼ぶようになるのですが、こうした考え方は平安時代の初め頃から信じられるようになりました。

これは神を仏として拝んだり、同じ敷地に神社や寺院を並べて建てたりという形となってあらわれますが、この「神仏習合」または「神仏混淆」と呼ばれる信仰の形は、明治政府によって「神仏分離」の政策が打ち出されるまで保たれ、日本文化を特徴づける伝統として、世界遺産に登録される際のカギとなりました。

さらに第二が「末法思想」です。これは長い時間が過ぎるとお釈迦様の力も薄れ、日本では1052年から不幸なことがうち続く「末法」の時代に入るとするものです。その影響から人々は不安に駆られ、生きているうちは幸せに、死後は極楽（天国）に行けるよう、聖地を訪れて神様や仏様に直接お願いする気運が高まるようになりました。

こうして「吉野・大峯」、「熊野三山」、「高野山」は、平安時代を通して修験道、神仏習合、真言密教の中心地として不動の地位を得るとともに、社寺を始め宿泊用の建物がそろい、組織や経済力も備わって、都や全国各地から数多くの人々を迎える「霊場」となり、一千年以上にわたって日本人の精神文化を支えてきました。

今日、世界遺産となった各霊場には、壮麗な神社仏閣をはじめ宿泊施設や土産物店が建ち並び、外国人を交えた観光客でにぎわいを見せていますが、それは長い歴史のなかで様々な要素が積み重なった結果です。枝葉の部分に惑わされて、霊場形成の根本である神秘的な自然のありかを、見失わないようにしましょう。



熊野の神々降臨伝承の地
神倉山のゴトビキ岩

地球環境に配慮した紙と大豆油インキを使用しています。PRINTED WITH SOY INK